

壱岐島の後・終末期古墳の歴史的意義

6・7世紀の外交と「国境」

The Historical Significance of the Late and Final Phases of the Kofun Period in Iki no Shima : Foreign Diplomacy and the "National Border" in the 6th and 7th Centuries

広瀬和雄

HIROSE Kazuo

はじめに

- ① 壱岐島の大型古墳
- ② 大型古墳の編年と系譜
- ③ 小型古墳の編年と構造
- ④ 6～7世紀の壱岐島の史的意義

おわりに

【論文要旨】

壱岐島には300基以上もの古墳がある。その多くは古墳時代後期から終末期にかけて築造されたものである。そのなかには巨石墳を含む大型横穴式石室が6基みられるが、夥しい数にのぼる古墳の造営は壱岐島の急激な内在的发展というよりは、つぎのような理由で外在的な要因を考えたほうが理解しやすい。

第一、6世紀後半ごろから7世紀前半ごろにかけては首長墓だけではなく、中間層も同時に多数、古墳を築造していて、前方後円墳・大型円墳・群集墳の開始と終焉が同時期という事実である。第二、それらは石室や石材の規模、複室と3室などの差異はあるが、基本的には同一形式の横穴式石室を採用している。首長層と中間層という社会的階層を超えての共通意識、イデオロギー的一体感の高揚が読みとれる。第三、そうした事態は壱岐島だけにはとどまらない。双六古墳にはじまって、笹塚古墳、兵瀬古墳、鬼の窟古墳、掛木古墳とつづく巨石墳は、九州でも有数の地位を占めるが、横穴式石室の巨石化は6世紀末ごろには北・中部九州の首長層にもおよぶ。巨石墳に媒介された〈われわれ意識〉が、広域の有力首長層に発現していたわけだ。

6世紀後半ごろには、新羅にたいする軍事発動をともなう国境防衛、そのための前線基地の役割を、地政学的位置に基因してか、壱岐島が果たすことになったようである。そこでの軍事と外交を担うため、福岡平野の首長が多数の中間層を率いて壱岐島へ移住させられ、北・中部九州の首長層はその兵站的役割を負わされた。そうした役割分担は中央政権の国境政策にともなうものであった。そのような事態に際して、国家の一員としての北・中部九州首長層が、イデオロギー的一体意識を高揚させたのではないか。それが共通形式の巨石墳の背景にあると考えた。

【キーワード】 壱岐島、巨石墳、われわれ意識、新羅、国境防衛